

【原 著】

幼稚園における食物アレルギー教育に関する
教員研修の実施とその評価
食物アレルギーの有無に関わらず、
心身共に健康な生活を送る子供の育成をめざして

新宅 由実子 井山 房子 黒住 知代 阿部 耕平 小谷 香代
鷹取 万友美 岡田 恵太 田中 真帆 三木 彩織

Implementation and Evaluation of Teacher Training on Food Allergy Education in Kindergarten
— Aiming to Foster Children Leading Healthy Lives, Regardless of the Presence of Food Allergies —

SHINTAKU Yumiko, IYAMA Fusako, KUROSUMI Chiyo, ABE Kouhei, KOTANI Kayo,
TAKATORI Mayumi, OKADA Keita, TANAKA Maho, MIKI Saori

2024

岡山大学教師教育開発センター紀要 第14号 別冊

Reprinted from Bulletin of Center for Teacher Education
and Development, Okayama University, Vol.14, March 2024

幼稚園における食物アレルギー教育に関する 教員研修の実施とその評価

食物アレルギーの有無に関わらず、
心身共に健康な生活を送る子供の育成をめざして

新宅 由実子, 井山 房子, 黒住 知代, 阿部 耕平, 小谷 香代
鷹取 万友美, 岡田 恵太, 田中 真帆, 三木 彩織※1

本研究の目的は、幼稚園において食物アレルギーと共に生活する子供を育む方策を検討することである。本研究では、食物アレルギー教育に関する教員研修を行い、研修中の教員の反応と研修前後のアンケート調査の結果を基に、その効果を評価した。

研修後には、食物アレルギーやその対応によって生じる子供達の心境へも目を向ける必要性の理解が深まった。また事例検討を通して、幼稚園においても幼児なりに食物アレルギーを理解して対応できるように伝える必要があると明らかになり、実際に指導できそうな具体的な場面も挙げられた。さらに研修中、脈々と受け継がれてきた“教育観”と、現在の多様化した時代背景や子供達の実態、社会的なつながりを踏まえて更新される“教育観”の中で揺れ動く教員の姿が見られ、その揺らぎや葛藤自体が、個別のニーズを適切に受け入れ、多様性を尊重する教師の観念を磨くことにつながっていると考えられた。

キーワード：食物アレルギー教育，食物アレルギー研修，幼稚園，教員研修，多様性

※1 岡山大学教育学部附属幼稚園

I はじめに

2012年に調布市で起きた食物アレルギー発症による痛ましい死亡事故以降、学校現場において、ガイドラインやマニュアルの整備、医師の診断に基づく対応等を含め、緊急時の対応研修は充実してきた。誤食を起こさない給食提供の手順を確立し、アレルギー発症時に適切に応急処置できる効果的な教員研修の実施が促進されている。一方で、教員の食物アレルギーに関する基礎知識の充実や子供達自身がアレルギー対応できる力を育成する指導は学校や個人の力量に任されている現状がある。

山田らは、食物アレルギーのある子の半数が学校での悩みがあることを明らかにしている¹⁾。その対策として“クラスメートからの理解を得るための支援”“誤食予防に向けた安全管理への積極的な参加による、安心した学校生活”を挙げている。また中川原らは、周りの人の気づかいや励ましを素直に嬉しいと

感じる学童期のうちに、自分の食物アレルギーのことを伝えて、理解し肯定してもらう経験を重ねることの必要性を指摘している²⁾。2022年度のアレルギー疾患に関する調査報告書によれば、食物アレルギー有病率は6.3%であり、2004年度2.6%、2013年度4.5%と比較して年々増加している³⁾。今後、全ての子が安心して生活できるようにするためには、誤食をしない仕組みづくりや緊急時対応の充実に加えて、学校全体がアレルギーに関する理解をより深めていき、心身共に健康な生活を送るための力を身に付けさせていくことが必要である。

そこで本研究では、食物アレルギー教育に関する教員研修を行い、その研修の効果を評価するとともに、幼稚園において、食物アレルギーと共に生活する子供を育む方策を検討する。

Ⅱ 研究方法

1 時期

2023年7月1学期の職員会議後、30分間の食物アレルギー教育に関する教員研修を実施した。2023年5月、9月にアンケートを実施した。研修内容の理解ではなく、教師の意識の変容があるかを調べるため、直前直後を避けた。

2 対象

アンケート調査は教員7名を対象とした。職員研修については、非常勤講師らも含めて15名を対象とした。

3 研修内容

はじめに、緊急時対応の確認や食物アレルギーに関する基礎知識の伝達を10分程度行った。その後、2件の事例検討を行った。検討した事例は以下の2点である。養護教諭から事例を提供し、それぞれ約10分間、教員ら7名が意見や考えを述べた。

【事例1】

今まで複数人で机を寄せて牛乳を飲んでいた。しかしA児がアレルギーを発症したことを境に、他の子が牛乳をこぼしてA児がアレルギーを発症することを防ぐため、翌日以降、机を寄せて飲むことをやめた。自分のアレルギーのせいで、机を寄せなくなったと考えてしまうA児の心境に触れ、どのような対応が望ましいか考える。

【事例2】

“食物アレルギーで食べられないものがある人がある”ということを知らないB児が、除去食を食べているC児に「食べないのは良くない」と言う趣旨のことを言った。C児は食べたいのに食べられない事を気にしていたので落ち込んだ。さらに、B児に指導を行うと自分が言ってしまったことの重大さに気付き、落ち込んだ。B児やC児の心境に触れ、指導の機会や時期、内容についてどのようなものが望ましいか考える。

4 評価方法

(1) 事前事後調査

調査内容は、所属と担当学年、教員の経験年数、食物アレルギーのある子を担任した経験の有無及び、食物アレルギーに関する意識についてである。意識については、以下の5点について回答を求めた。アンケートはGoogleフォームを用いて、6名から回答を得ることができた。

- ① 食物アレルギーに関する対策や備えとして取り組んでいること
- ② 食物アレルギーに関する対策や備えとして大切だと考えること
- ③ 食物アレルギーに関する指導内容ごとに適当だと考える発達段階
- ④ 実際に行った食物アレルギーのある子への指導内容
- ⑤ 食物アレルギー研修で知りたい内容

①②については、“直接、保護者に食物アレルギー発症時の症状等を確認すること” “アレルギー児がアレルゲンを摂取しないよう声をかけること” “他の子からのいじめ等がないか注意を払うこと” “授業やお便り等で食物アレルギーについて啓発すること” “周りの職員に聞いたり、web等で調べたりして自分なりに勉強すること” の5項目を設けた。①は取り組んでいる程度、②は大切だと考える順番を1番から3番目まで回答を求めた。

③④については、食物アレルギーのある子に対して“友達から質問された時に、自分なりの言葉でアレルギーがあることを伝える姿” “症状が出ていない元気な時には、発症時の症状を自分で説明する姿” “自分で食べたいものを自由に選んで、食べられるか保護者と相談する姿” “成分表や詳細献立を保護者と一緒に確認する姿” “アレルギーは生活習慣と関係しないことを分かる姿” の5つの姿を項目として設けた。また、全員に対して“体調が優れないことを自覚できる姿” “体調不良時には、無理をしない姿” “対応食等を見て疑問に思ったときには、なぜ自分と違う食事なのか質問する姿” の3つの姿を項目として設けた。③は、適当だと考える発達段階を、幼稚園、小学校低学年、小学校高学年、中学校、その他の中から選択し、その他を選択した場合には具体的な時期の回答を求めた。④は指導しているもの全てを選択するよう求めた。

⑤は、自由記述とした。

(2) 研修に対する教員の意見

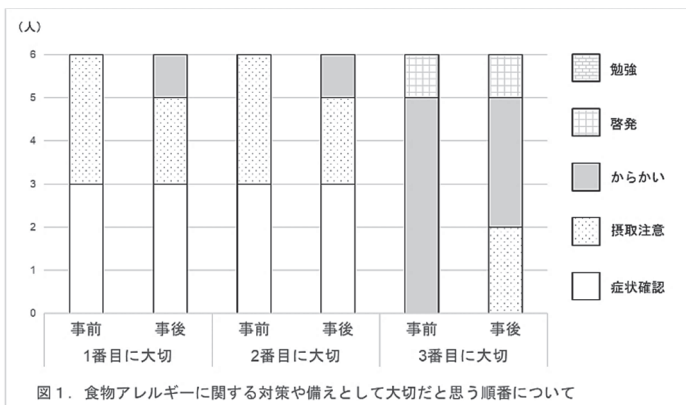
研修の中で、事例検討する際の教員の反応を参与観察し、逐語録を作成した。食物アレルギー対応に関する意識に関する意識に関わる発言内容をコード化し、分析した。

Ⅲ 結果

1 意識調査：事前事後の比較

食物アレルギーに関する対策や備えとして、教員が大切だと考えている順番について図1に示す。研修前は、“直接保護者に症状等を確認すること” や“アレルギー児がアレルゲンを摂取しないよう声をかけること” のどちらかを1番目、2番目に大切と考えており、続いて“アレルギー対応によって仲間外れや

からかい等が起きていないか注意を払うこと”を大切と考えていた。研修後と比較すると、全体として大きな変化は見られなかった。しかし研修から1ヶ月経過した後であったにも関わらず、“アレルギー対応によって仲間外れやからかい等が起きていないか注意を払うこと”を1番目、2番目に挙げたものもあった。



食物アレルギーのある子への指導内容ごとに適当だと考える発達段階に関する質問については、研修の前後とも個人によってばらつきが見られた。研修後に大きな変化が見られた項目としては、食物アレルギーのある子が“成分表や詳細献立を保護者と一緒に確認する姿”（図2），“アレルギー

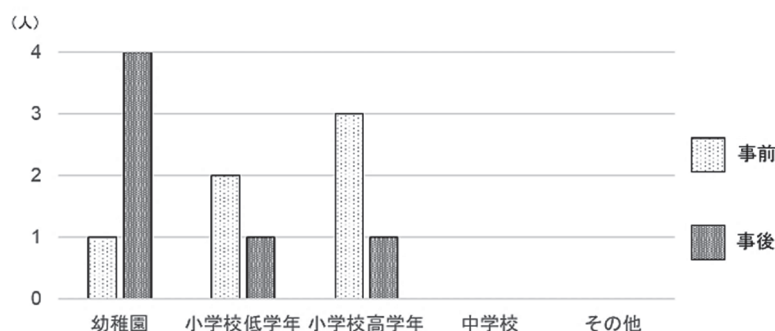


図2. 食物アレルギーのある子が「成分表や詳細献立を保護者と一緒に確認する」姿を引き出す指導に適切だと考える発達段階

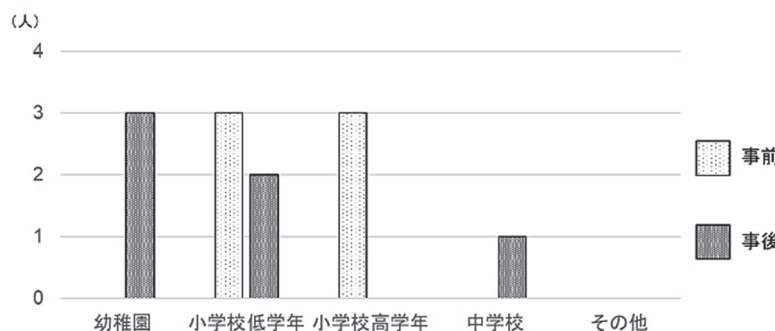
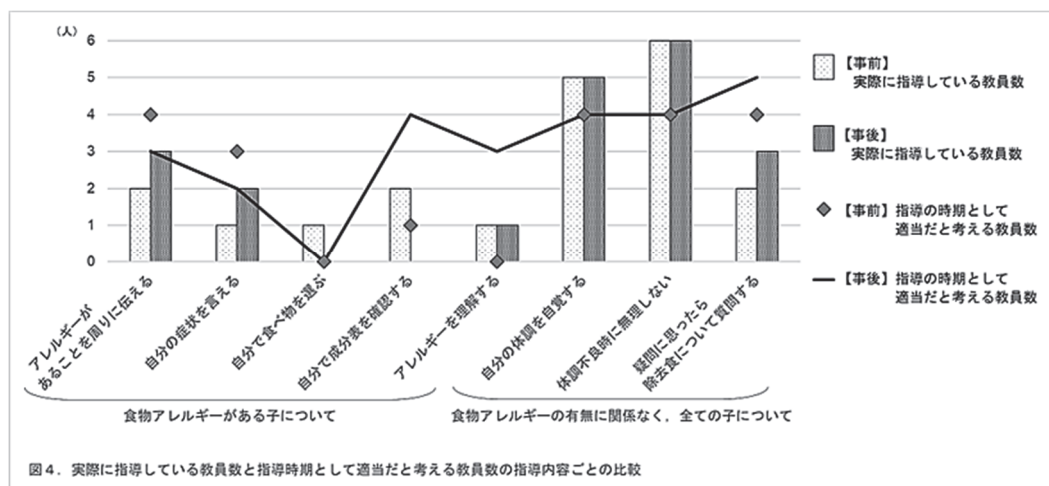


図3. 食物アレルギーのある子が「アレルギーは生活習慣と関係しないことを分かる」姿を引き出す指導に適切だと考える発達段階

ーは生活習慣と関係しないことを分かる姿”（図3）の2項目であった。成分表や詳細献立を自分で確認することについて、研修前は小学校高学年までに指導するのが適当と考える教員が多かったが、幼稚園の段階で指導するのが適当と考える教員が増えた。また、アレルギーが生活習慣とは関係ないことを分かる、つまり自分の生活の行いによって食物アレルギーを有することになったわけではないと理解することについては、小学校で指導する教員がほとんどであったが、研修後には小学校低学年までが指導の時期として適当であると変化した。

続いて、幼稚園において、実際に指導している教員数と指導時期として適当だと考える教員数を指導内容ごとに比較した結果を図4に示す。研修後において、指導の時期として適当であると考えているにもかかわらず、実際には指導していない項目は、食物アレルギーがある子について“自分で成分表を確認する姿”と“アレルギーを理解する姿”，食物アレルギーの有無に関係なく、全ての子について“疑問に思ったら除去食について質問する姿”の3項目であった。



2 研修時の反応

研修時の逐語録から、主なコードを抽出し、カテゴリに分けて整理した。その上で、現行の指導等に関すること、今後の指導等に関すること、課題の大カテゴリに分けた。

< 現行の指導等に関すること >

カテゴリ名	主なコード
誤食防止の指導	・ 弁当時に、友達とおかずを交換しないよう指導している。
当たり前と思う	・ 牛乳を飲む活動が当たり前になっていた。

< 今後の指導等に関すること >

カテゴリ名	主なコード
事故防止の意識	・ 事故が起きないように徹底することが大事である。 ・ 食物アレルギーは命に関わることで、管理をする責任がある。
組織的な対応	・ アレルギー児にアレルゲンが付着することや、誤食等は絶対にあってはならないため、システム的に対応する必要がある。
環境の工夫	・ 席を離す以外にも、必ず教師が付いたり、パーテーションを設置したり等の対応が考えられる。
指導機会の検討	・ 目的をよく考えて、子供にとって本当に必要な活動かを見直す必要がある。 ・ 機会を捉えて指導できるよう事前に、指導内容を決めておく。 ・ 特別に機会を設けずとも、普段の生活の中で子供たちが知れる機会を積極的に作っていききたい。 ・ 数種類から選ぶ機会を設けても良い。
給食（小学校）への接続	・ 年長児が小学校で給食を食べる機会を利用し、指導できる。 ・ アレルギーのために除去食を食べる人がいることは、給食が始まる前に知らせておかなければならない。

本人への指導内容	・A児が辛い思いをしないための工夫や、事前に伝えて納得できるようにすることが大事である。 ・周りの子が事故で、アレルギー児にアレルゲンを付着させてしまった場合には、お互いに辛い思いをする
周囲の子への指導内容	・弁当時に、アレルギーで食べられないものがある人がいるという指導ができる。 ・“アレルギー”という言葉だけでも知っておくことは、大事なことである。 ・子供達にアレルギー児の心境について理解させるには、落ち着いていて、心に届く状況で話をしなければならない。
保護者との連携	・今後、保護者へ指導した内容を伝えることも大事である。

<課題>

カテゴリ名	主なコード
準備の負担	・数種類から選ぶ機会を設けることは、教員にとって、用意する負担が大きい。 ・全員が飲めるものを探すことは、教員にとって負担である。
発達段階に応じた指導の必要性	・数種類から選ぶ機会を設けても、年齢的に難しい学年がある。
子供に経験させたい活動	・子供達が同じ場で、同じものを飲む経験もさせたい。

IV 考察

1 研修の成果

佐藤は、2～6歳の幼児期は「前操作期の段階にあり、アレルギーは自分が悪いことをしたことの罰であると考えがちである。」「罪悪感を持ちやすく、自発性が欠如しがちになることに留意すべきである。」としている⁴⁾。今回、研修を実施することで、食物アレルギーの発症に関することだけでなく、食物アレルギーやその対応によって生じる子供達の心境へも目を向ける必要性の理解が深まったと考える。さらに佐藤は「親への説明に加えて子どもへの説明は不可欠である、その説明は具体的であることがのぞましい。」とも述べており、研修後、食物アレルギーのある子に対して“成分表や詳細献立を保護者と一緒に確認する姿”や“アレルギーは生活習慣と関係しないことを分かる姿”について、幼稚園の段階で指導するのが適当であると考えた教員が増えたことは、研修の成果と言える。これは、幼稚園で実際にあり得る生活場面の事例を検討したことによって、教員が指導の必要感を持ちやすかったり、具体的な指導場面をイメージしやすかったりしたことが影響していると考えられる。食物アレルギーの有無に関わらず、子供達が心身共に健やかに生活するためには、教員が食物アレルギーのある子の心理的な特徴について、知っておくことが必要であり、食物アレルギー研修の内容の一部に食物アレルギー対応によって生じる子供達の心境に触れた事例検討を設けることは、指導に対する必要感をもったり、具体的な指導場面や内容をイメージしたりすることに有効と言える。

2 幼稚園におけるアレルギー教育の必要性

幼児期は、自分の生活を離れて知識や技能を一方的に教えられて身に付けて

いく時期ではなく、生活の中で自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験から、この時期にふさわしい生活を営むために必要なことが培われる。食物アレルギー有病率は、年々増加している。食物アレルギー対応は、幼児が友達と集団生活を営む上で実際に体験する問題となってきた。教員が研修後、食物アレルギーのある子が“成分表や詳細献立を保護者と一緒に確認する姿”や“アレルギーは生活習慣と関係しないことを分かる姿”について、指導に適当な発達段階として幼稚園を挙げた背景には、事例検討を通して幼稚園の具体的な生活の中で、確かに幼児にとって必要な姿だと捉えていたことがある。これまでは食物アレルギー対応が必要な子はそれほど多くなく、幼児の生活から離れた問題であったかもしれない。しかし食物アレルギーのある子が増加し、自然な生活の流れの中に食物アレルギー対応が当たり前に存在する現在では、幼児教育の考え方に沿って、幼児なりに生活に必要な力を培っていく必要があると教員は考えていた。今後も、幼児の自然な生活における食物アレルギー対応の実例の事例を教員で検討することにより、幼稚園において必要な食物アレルギー教育の場面や内容を、より具体的にできると考える。そうすることで、必要だと感じているが、実際の指導には繋がっていない内容である、食物アレルギーのある子が“成分表や詳細献立を保護者と一緒に確認する姿”や“アレルギーは生活習慣と関係しないことを分かる姿”、全ての子が“対応食等を見て疑問に思ったときには、なぜ自分と違う食事なのか質問する姿”についても、充実した指導が行えるだろう。

3 心身共に健康な生活を送る子供の育成

現代社会は、メディアやテクノロジーが進化したり、グローバル化が進んだりすることによって、異なる文化や意見、価値観がもち寄られることにより多様化している。これに伴い、学校においても、子供の多様性に対応する必要がある。朝倉は、教師の在り方に関わる視点として「寛容性」と「信念」の二つを提示している⁵⁾。多様性に対応する主体に培うことのできる性質として「寛容性」を位置づけ、学級・学校・コミュニティに醸成していくことや、言葉の上での多様性の尊重や形式的な対応ではなく、価値観や信念の次元で多様性を受容することやそれを学校のカリキュラムないし教授学習活動として組織化しようとする態度の形成は本質的な課題である。さらに山ノ内らは、学校給食のありようを「一斉共同体主義」そのものであると指摘し、みんなと同じ給食を食べられるようにという取組が「同じものを食べなければならない」というマジョリティによる文化の押し付けに陥らないように留意することは必要であり、「みんなと同じものを食べたい」という気持ちを尊重すると同時に、「みんなとは異なるものを食べる」という選択も尊重しなければならないとしている⁶⁾。

事例1を検討した際に、みんなで牛乳を飲むという活動のそもそもの目的を改めて見つめ直すことの必要性が挙げられたこと、一方で、やはり同じ場で同じものを飲む経験を大切だと考える教員の観念を明らかにできたこと等はそれ

自体が、多様化に対応する教員の実践として価値がある。幼児期は、信頼や憧れをもつ教員を含む周りの大人の言動や態度を模倣し、取り入れる。人格形成の基礎を培う幼児期であるからこそ、食物アレルギー対応においても特にこうした点への配慮が必要である。

V 結論

本研究では、食物アレルギーに関する教員研修において、基礎知識の伝達や緊急時対応の確認だけでなく、幼稚園で想定される食物アレルギー対応の事例を用いて子供の心境まで配慮した対応について検討した。これまで食物アレルギー対応は、子供の生活から離れたものであったが、研修を通して、食物アレルギーが増加しており身近な問題であることが共通理解され、事例を検討する中で、幼稚園においても幼児なりに食物アレルギーを理解して対応できるように伝える必要性があることが明らかになり、実際に指導できそうな具体的な指導場面も挙げられた。今後は、指導の必要はあるが実際には指導に至っていない内容である、食物アレルギーのある子が“成分表や詳細献立を保護者と一緒に確認する姿”や“アレルギーは生活習慣と関係しないことを分かる姿”，全ての子が“対応食等を見て疑問に思ったときには、なぜ自分と違う食事なのか質問する姿”についても、実際の事例を検討することで、教師が具体的な指導イメージをもてるようにすることが必要である。

また事例1の検討の際には、これまで脈々と受け継がれてきた幼児教育の伝統のような“教育観”と、現在の多様化した時代背景や子供達の実態，社会的なつながりを踏まえて更新される“教育観”の中で揺れ動く教員の姿が見られた。その揺らぎや葛藤自体が、個別のニーズを適切に受け入れ、多様性を尊重する教師の観念を磨くことにつながっていると考える。今後は、こうした研修を通じて教員の専門職性の育成に向けた職能開発を行うことについても検討していきたい。

参考・引用文献

- (1) 山田知子, 石井真, 浅野みどり, 杉浦太一, 縣裕篤: 食物アレルギーを持つ児童の学校生活における悩みと取り組みの実際, 日本小児難治喘息・アレルギー疾患学会誌 第14巻第3号 2016: 268-275
- (2) 中川原康子, 三浦綾子: 成長過程における食物アレルギー児と非食物アレルギー児の疾患知識と意識の関連性, 日本食育学会誌 第8巻第1号 2014.1: 29-39
- (3) 日本学校保健会: 令和4年度アレルギー疾患に関する調査報告書
- (4) 佐藤いづみ: アレルギーと子どもの心, 小児科臨床 57 2004: 1410-1416
- (5) 朝倉雅史: 子供の多様性に対応する教育と教師の在り方, 学校経営研究 48 2023.5: 14-24
- (6) 山ノ内裕子, 四方利明: 食マイノリティと多様性—学校給食における食物アレルギーおよび宗教対応をめぐる一, 関西大学人権問題研究室紀要 81

2021. 3 : 29-50

Implementation and Evaluation of Teacher Training on Food Allergy Education in Kindergarten — Aiming to Foster Children Leading Healthy Lives, Regardless of the Presence of Food Allergies —

SHINTAKU Yumiko*1, IYAMA Fusako*1, KUROSUMI Chiyo*1, ABE Kouhei*1, KOTANI Kayo*1, TAKATORI Mayumi*1, OKADA Keita*1, TANAKA Maho*1, MIKI Saori*1

This study aims to explore strategies for nurturing kindergarten children with food allergies. Teacher training on food allergy education was conducted, and its effectiveness was evaluated based on teacher reactions and pre- and post-training surveys. The training deepened the understanding of the importance of addressing the emotional needs of children with food allergies. Case studies revealed the necessity of conveying this understanding to preschoolers and equipping them to respond appropriately. The study also observed teachers navigating between traditional and evolving educational perspectives, with observed fluctuations and conflicts contributing to refining teachers' beliefs toward embracing individual needs and diversity.

Keywords: Food Allergy Education, Food Allergy Training, Kindergarten, Teacher Training, Diversity

*1 Kindergarten Attached to the School Education, Okayama University